

都市近郊型オオタカの繁殖生態「特に食生態について」

名古屋大学 芳賀 大

研究背景

近年オオタカ *Accipiter gentilis* は都市近郊^(※)に進出してきており、愛知県内でも市街地に囲まれた緑地公園などに営巣が確認されている。それらのオオタカの繁殖生態については、学術的な調査はあまりなされておらず、公開されている育雛期の食性に関する研究が少ない現状である。

オオタカが都市近郊で営巣できるようになった要因として、ムクドリやハトなどの都市鳥などが多いためではないかと考えられる。しかし申請者が観察している愛知県内の調査地では搬入頻度がほかの地点に比べて少ない。

また、オオタカの狩場は農耕地と森林がモザイク状にある環境でよく行われるが、都市近郊に営巣するオオタカではそのような狩場がほとんどない。昨年ビデオカメラを使用した調査の結果、育雛期後半になるとメスも狩りに参加する行動が見られ、合計の推定搬入餌重量はオスの約 2 倍となった。このため、都市近郊ではオスだけではなくメスがどこで狩りを行うのかも重要である可能性がある。

(※都市近郊型の定義は難しいが、ここでは営巣木から半径 3 km 以内の範囲で市街地の割合が 6 割以上であり、緑地や畑作地などの自然的要素が 3 割以下とする。)

明らかにしたいこと

都市部で営巣できるようになったのは餌資源が豊富であると考えられるが、営巣緑地内ととっているのか離れた場所ととっているのかは不明である。都市部のオオタカを保全するにあたっては単に営巣している緑地だけではなく狩場も含めた環境を保全する必要がある。本研究は愛知県内の営巣地を主に都市近郊での育雛期の食生態と、どのような場所で狩りを行っているかを明らかにすることを目的とする。

方法

1、ビデオカメラ撮影法

巣の内部が分かるようにビデオカメラを設置し搬入餌生物を特定する。種が特定できない場合はサイズから餌重量を推定する。また録音されたオオタカの鳴き交わしから雌雄どちらが持ってきた餌かを特定する。

2、定点配置による観察

営巣地である緑地の周囲に観察者を配置し、緑地からどの程度離れた場所に行くか行動圏推定を行う。

3、発信機調査

可能であれば育雛期中のオオタカに発信機を装着し、行動圏推定を行う。

4、推定の狩場環境、周辺環境解析

オオタカは林縁部から畑作地に飛び込むように餌を狙うことが多い。そのため GIS を用いて行動圏内における土地利用割合を算出し、狩場となる畑作地、林縁部の割合などを評価する。

これまでの調査結果(2014 年度)

営巣環境

2014 年度は規模の異なる緑地(大規模緑地、小規模緑地)で営巣が確認された。大規模緑地は面積が約 121ha の緑地公園であり、園内の施設等を除いた面積は約 106ha である。小規模緑地は面積が約 2.3ha の神社の境内に残された緑地であり、住宅街に囲まれ、営巣木から半径約 1km 内には小規模の緑地公園や緑地帯、池などが点在しており、数キロ離れると大型河川がある環境である。

環境解析の結果、大規模緑地では市街地の割合が約 68%であった。小規模緑地では約 81% であり市街地の環境が多く緑地や畑作地のような自然的要素が少なかった(表 1)。

餌メニュー

巣に搬入された餌は両緑地ともに小型サイズ(スズメ大)、中型サイズ(ムクドリ大)の搬入数が多かった。また育雛期の後半に両緑地ともに大型サイズ(ハト以上)の餌が多く運ばれるようになった。大規模緑地の大型サイズの餌は全てカラス類であり、小規模緑地でも大型サイズの餌 11 個体のうち 6 個体はカラス類の搬入であり、その他はバン *Gallinula chloropus* と不明 4 個体であった。観察した育雛期全期との育雛期中期の搬入頻度を比較すると、大規模緑地では 1 日あたり約 5 回に対し小規模緑地は約 3 回であり搬入頻度が少なかった。

	大規模緑地	小規模緑地
環境要素	割合	割合
市街地	66%	81%
緑地	14%	6%
畑作地	6%	2%
裸地	10%	7%
水域	4%	4%



助成金の使い道

ビデオカメラや発信機などの購入費用に充てる予定です。